日本統治下台湾の「植民地化」心理——その意識構造と行動倫理——

田 才 徳 彦* 

The Mind of the Taiwan Colonization under the Japan Government: 
Its consciousness structure and behavior logic 

Norihiko TASAI 

I. 問題意識と課題の設定

本稿の目的は、1895年日清講和条約により台湾を清国から割譲し、その後50年間にわたる統治過程のなかでの台湾住民の抗日運動から、特に1920年代〜1930年代にかけての台湾社会に社会的経済的条件が備わり台湾に「民族」(nation)の概念が導入され、政治上のイシューとして問題化された時期における台湾住民の抗日運動の分析に焦点を絞り検討したい。 

台湾住民としての、共同運命感が形成された起点は、台湾が日本の植民地体制に組み込まれたときであったと、言える。その後、台湾住民の抗日運動は、武力の手段で行われた運動や、土着資産家階級、日本留学を経験した新しい民族的自覚をもった新しい知識層たちが、総督府の懐柔策のなかで植民地台湾独特の政治・社会運動を行った。

* 総合文化センター 非常勤講師
平成12年10月18日受付 

ところが、これらの運動は、戦後においては、日本の植民地支配に対する民族的抵抗の運動、即ち抗日民族運動として概括されている。これらはもちろん正しい。被支配民族自身の歴史の観点からみるならば、これらの運動は、植民地支配下の明白な民族矛盾の存在を前提に、植民地的差別・圧迫・収奪に対する民族的抵抗の意識を有していたからである。

だが、抗日運動といっても、そこに「台湾住民の抗日意識」「祖国中国との心的連関」「抵抗運動すなわちナショナルな観念のもとでか」さらに「ここでいうナショナルとは何か」という視点から1920年代台湾民族運動が可能になった条件やその抵抗運動を見直すと、政治運動における、抗日運動の台湾住民の抗日意識は、日本支配への抵抗の中から「台湾人としての意識」が生まれたが、それは日本統治期には「民族意識」のレベルでの運動としては認識できない。つまり、問題を簡略すれば、台湾は17世紀から中国大陆の福建系、広東系からの渡来者からなる移民社会であり、言語や、人種の異なる集
団による社会集団によって構成され、台湾住民の自己証明となるべき単一の言語はなく（言語は人々の自己証明であるが）、彼等の間には共通の意思が希薄であった。

=2= 互いに住民が、生物的には漢族の系統に属しているが、共通社会を意識し、なんら独自の政治的単位をとることはなかった。

したがって、国民国家の形成を前提とした西欧的ナショナリズムの議論や、植民地における宗主国との対等の権利要求という自覚にたって、植民地における宗主国からの独立をとったナショナリズムの議論と同一の文脈としては認識できない。

そこで、こうした問題意識にとどまって、本文はつぎのよう構成される。第二章では、1920年代後半の日本統治期における台湾社会の心理状態を分析する。つまり、植民地権力の台湾社会への介入なしに浸透から、台湾住民に「植民地化」されたという認識がもたらされた対内的・対外的要因、さらにそこから、住民の心理的意識形態を分析し、3つの意識形態を設定した。第三章では、どのような心理的意識形態から生じた抗日運動から4つのレベルの運動様式を指摘し運動の目的、手段、関連形態を解明する。そして最後に、全体を整理したい。

1) 植民地台湾の住民は、被統治民族としては、中国大陸からの移民の子孫である漢族系の子孫である漢族系住民と少数の先住民族（日本統治下での呼称は「生蕃」もしくは「蕃人」と称した。のちに、1923年（大正12年）4月、撰政宮裕仁親王が訪れたのを機に「高砂族」という新しい名詞がつくれられた。「高砂」は台湾の意味である。

戦後中国政府による呼称は「高山族」ないし「山地同胞」という呼称に変わった。1980年代以降のアイデンティティ回復運動における自稱は「原住民」ないし「原住民族」という呼称が使われている。ただし、引谷多喜夫「台湾人呼称について」（『釧路短期大学紀要』第17号、1990年3月）をみよ。小稿で台湾住民という時は、漢族系住民を指す。

また、台湾人によって、「台湾人」という呼称が最初に用られたのは、祭儀火が、1921年その著「台湾教育に関する根本主張」（『台湾青年』3巻3号、1921年41頁）のなかで使われたのが初めてであると言われている。

2) 日本統治下における「台湾人」として自覚された共通的内容として明確なのは「日本国家－日本人に差別・压榨される」「その差別・圧榨に抗する（抗日）」という点である（若林正文「中国非主流地域のサバ・ナショナリズム」山内昌之他編「いま、なぜ民族か」東京大学出版会、1996年、所収）59頁）。

II.「植民地化」状況での認識過程と心理様態

(1)「抗日」の認識要件

日本の植民地支配以前の台湾は、オランダ、スペイン、清末の支配下におかれていたが地理的には一つの統一ではあっても、生活空間を異にする宗主国と呼ばれる各系血縁集団や血縁・地縁で結びついた小集団の村落の集まりであり、国家の態をなしていない政治的貧困地域であった。そこで、一般住民の政治意識はしばしば無気力の現れであるとされ、それがいえることとは、その政治行動は士绅とのパート・クライアント関係（互酬関係）による上下の結合関係により、住民と士绅の指導下にあって政治意識を伴わないままに行われることが多かった。

50年間にもわたる日本の植民地支配過程（1895年－1945年）の抗日運動の性格は、一般に3つの時期（前期・中期、後期）に大別される。1895年－1905年までの前期20年間にわたる各地の土著勢力たちが結出した混成義勇軍の激しいゲリラ活動。それでは、総督府による土地の接収や地方税の徴収、風習に対する軽蔑などの生活様式への侵入や経済的搾取から、いわば自然発生的に「郷土」が外的（外集団）の侵略を受けたとする認知のもとに、地域レベルの心性（集団意識）が、原始的な自我防衛の本能とともに連動したものであった。そこに、中華帝国意識にとどまる抵抗がみられるが、いわば対外的インパクトに対するブリントゥハンな「抵抗」反応の状況として見出される。1907年－1915年間の中期は、植民地支配確立後に強行された植民地開発に伴う取締に対する対民の抵抗や大陸における辛亥革命（1911年）の余波に及ぼし、これが土地の官吏や入会権入会税や徴役に対する不満と結び付いてしばしば発生した。

台湾総督は1896（明治29）年3月に制定された台湾総督府条約によって行政権、司法権、軍事権を併せ持ち、同時に制定された法律63号（63法）によって律令制定権＝立法権も与えられ、総督は強大な専制的権力をもつようになった。1916年以後は、武装決起による日本支配の転覆企図が圧倒的に優勢な日本の軍事力の前に鎮圧された。「台湾民報」は、ある社説で「もし三百万の台湾人が皆兵士とな一時の勝利を得たとしても、（日本）皇帝の大軍がひとたびやってくるやたらちま（台灣）は廃墟になってしまうから」と述べている。

こうして日本の植民地統治を受けれてから既に20年近
日本統治下台湾の「植民地化」心理——その意識構造と行動倫理——（田中徳彦）

経過し統治初期の抗日運動は、総督府の鎮圧によって、ほぼ消し去られ、全島にわたり抗日エネルギーが表面的には沈静化していくようにになる。

この頃、国際的には1917（大正6）年11月にロシア革命、翌年1月に、第1次世界大戦後の講和関係にあたるアメリカのウィルソン大統領が「民族自決」を唱え、これらの影響もあり、1919（大正8）年3月に朝鮮で独立運動をめざす3.1事件、同北京での5.4運動などの植民地解放の世界的潮流は、朝鮮人と台湾人に、大きく刺激された。日本国内では、1918（大正7）年9月に、明治維新以後の課題政治と官僚政治の端緒をひらいた政友会を基礎とした政友内閣が成立した。政党内閣は、こうした国際的動きに応じて明治行政の軌道修正によりかかった。

台湾社会では、警察制度の拡充による社会の端末的村落レベルまでの植民地権力の浸透する一方、いわゆる「資本主義化の基礎工房」が整備され、財産基盤が確立、土地整理や産業振興に伴う日本人の財産権が定まるようになる。それに伴う全島的規模（island-Wide）にわたる、交通及び情報のネットワークの拡大、人々の空間的移動の顕在化が起了。また、植民地下での近代的教育を媒介として、日本語を通じて西欧の科学技術を吸収により日本、大陸への留学生（知識人階級）の出現することになる。

かれらは、日本国内のデモクラシー・自由主義の潮流の刺激をうけ、何か可決の形で民族的差別と抑圧とを体験して日本支配に対してはっきりと批判意識を自覚するようになり、自らの生活まちや生活空間の存在に対する決して理解が不足するようになった。そして運動の舞台を、郷里の閉ざされた空間に限定せず、概念的にも実験的にも全島規模に広がりを博し、それらをめぐって抗議を共にした。このような状況において、「台湾人」「台湾史」は文化的・政治的意義をそなえた新しい言葉となり、台湾はもはや単なる地理的名詞ではなくなり、同時に新しい形での抗日運動が起こってくる。

(2)「植民地化」状況での意識のジェンダー

一般的に「植民地化」された社会（住民）は、「数の圧倒的優位と完全に支配された状態」であり、「多数であっても社会学的、政治的には少数」となる。フランス統治下のマンダスカル社会を研究したオ・マンノーニの植民地化状況は、社会学的側面において、「基本の差異」が相互理解の不毛さから成り立っていると、「指摘しているように、被植民者の伝統文化の破壊、政治的従属、経済的搾取により、必然的に被植民者の抵抗を喚起する。

そこでこのような植民地住民が、「植民地化」されたと、その事実を認識した時、つまり植民地権力の社会の介入がない、浸透から心理状況をいかなる住民の意識構造が形成できるか、かかる問題が理論的なレベルだけではなく感情レベルをも含むため、いまがいは推論できないが、ここでは一つの認識枠組みとして台湾社会での「植民地化」状況下における3つの心理的意識構造を提示したい。

直接暴力意識

植民地化により阻害された人的回復をもたらすために植民地権力に対し、直接的な手段で暴力に訴えようとする意識である。

自己分裂（自己喪失）意識

植民地に、より高度な知識のある宗主国（植民地権力）を媒体にして文化、経済が導入されるのが恒常化した場合、無意識のうちに宗主国（植民地権力）への評価が高くなり、支配を肯定し受け入れ貧民の念するに生まようとするようになる。

つまり、植民地権力への向かいに植民地住民が組み込まれることにより、いわば「自己の拒否と他人への愛（植民者への愛）」に運動し、自己認識を捨て去って、別の存在になり、従属化された社会の中で自己認識を見出そうとするということにより、自己分裂像が顕在化してくる。それには、フランス・フランスが黒い皮を着ているアルティールは覚醒後、ニグロの美しさをアフリカ人をたたえるようにになったが、それ以前は種族的に近いアフリカ人を軽蔑し、支配者である白人（フランス人）にたいして「私の肌を気にかけないでほしい」、それは陽が燃えいたからであって、「私の心はあなたの心と同じように白いのです」と、自分のアイデンティティをむしろフランスに求めた。

かなような認識は、自己の拒否感情から植民者との自己同一性を求める意識であり、台湾社会においても1920年代から30年代にかけての二重の精神的変化を受けて自我形成期を送り台湾知識人の文化の「日本人化」の征候も端的にみえるようになる。

例えば、数年も内地（日本本国）に留学し、官吏として台湾の一地方官庁に奉職した漢族系台湾人青年「陳清文」と結婚した本国の内地人女性との台湾での生活を素材にした小説「陳婦人」は、内地での長年の生活によって久来の礼儀作法を忘れ、「失態」を演じた。しかし、恥ずかしく思わず、むしろ久来の作法を守る人々を

—161—
「一段低く見ていた。西洋風のエチケットでその夜のような不器用を演じたなら真紅になっていたと思うが、台湾の礼儀作法のしつこうに陥ることは一向も恥もせず、むしろ得意な風らしく突きめるのである」[15]。このように、内地人風の家に住み、内地人風な生活をするようになり、日本の支配権にコンビニの人間が生まれ、圧迫者の走狗と化すものが現れる。

しかし、このような植民者との自己同一性を求める者にとっても、時間の経過とともに、自己の生活環境への執着、懸想から自己否定する態度に耐えられなくなるようになる。そこには、「植民者は狼に似ていない。しかし狼は巧妙になればなるほどうまく真似をし、よいよい植民者をいだたせる。」[16]と、したような表裏一体からの抵抗意識が潜在的に加速する。

例えば、日本語教育の強制が強まり台湾人は社会生活において、二重言語の併用（日本語、台湾語＜閩南語＞）状況が拡大するようになる。しかし実際には、「…本島民諸君の家庭に入れて見ると、市街では、街角至る所の家庭では、殆ど国語を聞くことができず、公学校では生生徒が国語の依って毎日勉強している居るのが校門をでたらすべてが国語を忘れの如く、台湾語を平気で使用して居るその事実を見て私は悲しまざるを得ない。」[17]と、するような総督府に対する面無感情の状況も、観察できる。

③「孤立意識」

植民地権力が浸透し植民者側の制度と接することにより、自らが最初の世界を形成してきたのは異質な文化に触れ、同時に植民地支配の生み出す民族矛盾にも直面し、鈍い精神の緊張を経験する[18]。

それは古代主義がもたれた文明開化の衝撃の下で、台湾知識人は、台湾古来の様々な非文明的な慣習を矯正しなければならないことを痛感した。また、矢内原孝雄が「台湾は日本と支那との二つの火の間立つ[19]」と述べたように、台湾知識人たちは、台湾総督府の圧力を自身の問題マンガ的分化や、後述するように日本や中国における革命運動の分裂、同様の影響に翻弄されつつも多彩な政治・社会・文化運動を展開した。

ところで、台湾知識人の心理的側面として、大陸中国への憧憬・期待であった。言うまでもなく、中国大陸から移民によって成立した台湾漢族社会における台湾知識人の動向に内乱する「祖国・中国」という志向を抜きに語ることはできない。自然、この時代の知識人にとって自己の倫理的な、または実践的な思考の枠組みとしての「台灣」および「台灣人」意識の自覚と「中国人」意識は、なんら矛盾することはなかった。時も「今日の台灣人特権階級のものを除く外大部」分中国を心臓として居ることは争われざる事実だ[20]と指摘されていたように、全体的に中国志向の高まりの時期であった。

台湾総督府編纂による「台湾社会運動史」によれば、第一次世界大戦後の頃すでに東京留學生の間には、「支那語の研究を行い、或は年号に支那年号を用ひ、支那を祖国と称し、排日気風をもる等、注意すべき傾向」があったという[21]。また、風俗の面でも、1920年頃までは和服を着て街を歩く漢族系台湾人青年の姿を描写する新聞記事がしばしば見られた。しかし、それ以後になると「上海服」と称する中國服スーツが知識人間の間に流行したという[22]。

かような中国志向の基調にあったのは、台灣住民が対岸からの移住民の子孫であることに起因する「父祖墳墓の地としての思慕に結びついた」という植民地権力の側面と、ウール・総督府の心理的反作用の側面をとあわせもつ「容易に払拭し難き（総督府側からの認識）「支那を祖国視する感情」[23]であった。台湾人作家具濤流の自伝的小説の中でのような描写が例証となる[24]。

台湾人…烈な郷土意識を持っているのと同時に、祖国愛もうまったっている。祖国を思慕し、亡々として祖国を愛する気持ちはだれでも持っている。しかし、台湾人の祖国愛は決して清朝を愛しているのではない。清朝は満州人の国であって、漢人の国ではない。日清戦争は満州人が日本と戦って敗れたのであって、漢人が敗れたのではない。台湾が一時日本に領有されてもいつかは正経時に戻せるのだろう。漢民族はかならず復興して自分の国を建設する。老人たちは夢の中でも、いつかは漢軍がきて解放してくれるものだと堅く信じていた。台湾人の心の底は漢という美しい立派な祖国が存在していたのである。…このみなぎる祖国愛はもちろん観念であるが、…どう、親に別れた孤児のように知り合いの親を慕う気持ちで、彼親がどういう親であるかは知らない。ただただ、懐かししい気持ちで思い、とにかく親の膝下におかれれば温かくからかうるものと一方的に心の中で꺼めていった。…この感情は知るも知らずの美しさである、おそらく異民族に統治された、植民地の人民でなければわからないだろう[25]。

くような指摘は、20年代に積極的に総督府に対して異議申し立てをした台湾知識人たるの行動のモチーフの一典型として、みごとに形象化されているとおもわれる。だ
日本統治下台湾の「植民地化」心理——その意識構造と行動倫理——（田川徳彦）

が、呉濁流も指摘しているように、大陸との間になんら矛盾もなかったわけではない。

呉が小説「無花果」のなかで、日本の植民地統治下の台湾では掲示校（台湾人ための学校）の教員になるが、日々の生活、日本人教員による差別により、新天地をもって日本に留学し、さらに「日中」にあこがれて大陸に渡った主人公の胡明に、同郷の先輩ですでに大陸で生活の基盤を築いている皆がアドバイスする場面がある。

大陸に渡った胡明は、北京語ができないこともあって、その社会に大きな違いを感じている。曾は台湾人であることを隠そうに忠告し、こう言う。

「われわれはどこ行っても信用されない。宿命的な奇型児のようなものであり、われわれ自身には何の罪もないのに、こうした待遇をうけることは不幸だ。しかし、どうにものならず、あくまでも集子根性にならず、言葉でなく行動で身の証を立てていくしかない。中国建設の犠牲になるという経験では、われわれはあえて人後に落ちる者ではないからな」

と、その複雑な立場を表現した。太明自身も、かつて日本留学中に中国留学学校総会の席上で、正直に台湾人と名乗ったためにとんだ屈辱を受けた経験があるだけに、曾の気持ちが実感であった。

胡明は留学中のある日先輩に誘われて中国留日同学会主催の講演会に参加する。

一人の若者が、太明のそばにつかつかとやってくる

「早稲田出身の陳です。広東番の者ですが、よくしょか」と挨拶した。その率直な調子によりみて、太明は

「台湾出身の胡太明です。高等工業学校に在学しています」

と挨拶を返した。そのとたんに相手の顔色がさっとかわった。陳は、たった今までの調子がどこから、みるみる侮慢の色を見せ、口をつめる。

「何、フン、台湾かね」

そう言うと、これ以上話すのもいまいましいといった様子で、太明のそばを離れていった。この二人のやりとりはたちまち周囲に伝わった。「台湾だ」「スパイかもしれない」というような意見が、波のようにひろがっていた。ひとりきりがおさまるといよいよそのない重苦しい沈黙があとを支配した。太明は居たたまれない気持ちで、話しを打つと、のがれるように会場を出た。そして、言い知れぬ憤りの気持ちをこらえながら、人通りの少ない淋しい道を足早に歩いていった20。

しかし、このような体験がありながら、胡太明は満州事変後に違和感を抱えながら大陸での生活をはじめ、中国女性と結婚するが、やがて満洲系台湾人であるがゆえ、スパイとして大陸の警察につかまり、台湾に逃げ戻ることになる。

以上に描かれたような大陸における台湾人への背景には、少なくとも両者間が、「満州国」、汪政府というような中国の傀儡政権において高い地位をえたものが台湾出身者の中に存在し、大陸他の地域なども、通訳として中国語の能力や日本語の能力が活用され日本の手先として使われていたと感じる事実がある。逆に大陸側の人間には「辺境」の出身者に対する差別意識があり21、それはまた台湾人の側の反発を招きもした。いわば相互に加害者であり、かつ被害者であり、こうした矛盾が生まれる22。しかし、こうした大陸と台湾の矛盾は、基本的には台湾が大陸から切り離されていたこと、そこから生ずる日本との関わりや、革命の経験などの歴史体験の相違、日本の台独支配の長期化とともに台湾と大陸との心理的距離の拡大（特に、大陸中国の人々の無理解や蔑視）が生じていたことにその原因をもとめられよう。

このように、台湾知識人精神構造における特色は、このような緊張と衝突が重なり合った精神的危機が一世代全体をとらえたとも言えよう。台湾社会を現地で観察した日本人ジャーナリスト柴田廉は、以下のような観察をしている。

台湾人が近年新教育に熱心になったのも、日本仏教の曹洞宗や臨済宗の説教に耳を傾けるようになったのも、国語普及会や風俗改良等が何等の反対なしに導かれて存在するもの…又若者たちは年少を通じて虚栄心を追い、議会設置請願運動等に身を賭すのも、若等は新境遇・新時勢から生まれた形を賭けたい望と要求との一種の発展と見る可なりものである…気の毒まる迷乱小羊である。指導と救済とを要求する直に寂びしき迷乱の羊である。或る青年は、自分等は今や退いて純粋日本人たる能は失い進んで純日本たる能は、正にその中間にこれ役にあずかる。心の寂しさを察し、突めて痛切に告白した。同の迷乱者を無理せずに正当に導くもの、是は、民族心理の原則に従順する真の同化政策を指すが他に何があるだろう23。

この観察は、台湾知識人の間に存在した二種類的生活——163——
様式の経験からの精神的危機の自覚をとらえている。「成る青年は、自分等は今や事を純日本人たる能はず、進んで純日本人たる能はず、正に共の間からふらって居る」というのは、前に述べたように、島内では弾圧と差別によって、一方、大陸では台湾人への蔑視によって起こされた孤独の心である。

以上における植民低下台湾の心理的意識形態から、1920年以降の抗日運動ではどのような行動様式が存在したか。以下、運動における目的、手段、闘争形態を分析したい。

注
1) 国立編訳版主編 細川達・永山英樹訳『台湾を知る』雄山閣出版、3頁。
2) 黃昭堂『清朝における台湾住民の意識—日本領台直前に当時を中心に—』東京·台湾独立連盟発行<台湾>第1巻第1号、1968年1月参照。
3) 黄秀政『臺灣史研究』臺灣学生書局、民國81年175-206頁参照。
4) 抽稿「台湾の抗日運動民族（1895年～1902年）—その抗日意識の認知分析を中心に—」(「日本大学大学院法学研究年報」第25号、平成7年11月所収) 355-357頁。

なお、この時期における抗日運動の分析は、黄昭堂『台湾民主国の研究—台湾独立運動史の闘争』東京大学出版会、1970年。許世楷『日本統治下的臺灣—抵抗と弾圧—』東京大学出版会、1972年。向山寛『日本統治下における台湾民族運動史』中央経済研究所、1987年。黄秀政『臺灣割譲再び未抗日運動』臺灣商務印刷所、民國81年。陶桂佐『台灣漢人武装抗日史1895-1902』国立臺灣大学出版委員会、民國75年などがある。
5) 政府革命が日本の植民地下にあった台湾民俗の民族意識にどのような影響を与えたかという点については、寺倉雄雄『中国革命の史的展開』汲古書院、189-216頁を参照。
6) 「対於台湾人役義務問題」<台湾民報>第二巻第十五号、1924年8月11日。
7) 原敬は日清戦争後外務次官の資格で台湾事務局委員として台湾統治制度の立案に参画した時以来、「台湾の制度は成るべき内外に近からしめ合いに内外と区別なくに至らしめることを要す」(原敬「台灣問題二案」、伊藤博文『新譯台湾資料』復刻版、原書房、1970年、所収)、32頁という持論を一貫しても首長就任が、その持論を進める好機であっ
た。
8) 矢内原忠雄「日本統治下的台灣」(復刻版、岩波書店、1988年、原著は1929年刊) 378頁。
9) 舟急義之訳『台湾史の成立とその課題』(溝口雄三他編『周辺からの歴史』アジアから考える(3) 東京大学出版会、1994年、所収) 226頁。

この時期の台湾における土着民族教育をみると、総督府は1888（明治31）年に満洲系台湾人のための初等教育機関として公学校を設立。公学校を卒業すると、いくつかの実業機関の他は、台湾総督府国語学校（台湾人の教員育成が目的。後の師範学校）と台湾総督府医学校（後の台湾医専・台湾帝大理学部）を設け、日本人教員の小・中学校への共学は認められてなかった。しかし、就学率が増えることにより、中等、高等教育を希望する台湾人入学階級の間には、日本人人向小・中学校への共学や台湾人入中学校の設立を求める声があがってきた（若林正文『統治政治と台湾土着主資産家階級—公立台湾中学校設立問題1912-1915—』アジア研究』29巻第4号、昭和58年、1〜41頁所収）。

また、資力ある漢民族系台湾人上層階級は、自分の子弟を日本内地の中学、専門学校へ留学させる傾向が増加した。1912（明治45）年250人、1921（大正10年）699人、1926（大正15年）860人と増加している（上杉八郎「日本統治下における台湾留学生—同化政策と留学生問題の展望—」国立教育所編『同化』第94巻、1978年）。

10) 「同上台湾史の成立とその課題」226頁。
11) O. Mannoni, Prospero and Caliban, tr. by Pamera Powersland, 1956, p. 31。
12) 黄昭堂「植民地と文化摩擦—台湾における同化をめぐる葛藤—」(平野健一編集『近代日本とアジア文化の交流と摩擦』東京大学出版会、1984年、所収) 187頁参照。
13) アルベール・メンミ、渡辺淳訳『植民地—その心理的風土—』三笠書房、1959年、151頁。
14) 中村哲『ファノの人間的精神』(法政大学『法学志林』70巻1号、1972年12月、所収) 7頁。 F. Fanon, Toward the African Revolution (pelican Book) p. 35。
15) 前揭『植民地と文化摩擦—台湾における同化をめぐる葛藤—』40頁。庄熊総『陳夫人』通文関、1944年4月。

さらに、かかる意識は30年代の皇民化運動によりより強くとなる。
16) 前掲『植民地—その心理的風土—』146-147頁。
17) 前掲「日本統治下における台湾留學生—同化政策と留学生問題の展望」20頁。
18) 若林正文『黄呂聰における「待機」の意味』(台湾近代史研究会編『台湾近代史研究』龍渕書舎、1979年、所収)
19) 前掲「帝国主義下の台湾」188頁。
20) 前掲「黄呂聰における「待機」の意味」82頁。
21) 台灣総督府警務局編「台灣社會運動史（台灣総督府警察沿革誌第二編編台以後の治安状況中巻）」1939年、24頁。
22) 鴨巻敦哉『台灣統治回顧』(台北、台灣警察協会、1943年) 303-304頁。
III. 抗日運動の態様と座標

(1) 4つの「抗日」の運動様態

それは、かような「植民地化」状況での3つの意識が実際に如何なる行動様式として確認できるか。武装抗日運動が失敗したものの1920年代から観察される抗日運動は、台湾知識人たちによる10余年の長いおおよぶ社会運動や、植民地台湾におかれた歴史的状況の特殊性から「大大陸中国」での運動も存在したように、その軌跡は極めて複雑である。

抗日運動（植民地支配からの解放）運動と一と一口にいても各アカデミーの「抗日」意識の戦略構想が直接暴力手によって法的運動や、集会、講演、請願、抗議などの合法的手段など、発現の仕方は多様であった。この時期の運動者の思想や一般市民の態度は、台湾総督府警察、台湾議会設置請願運動者についての次のような分析がその例証となるか。1)

「本運動に従事しつつある者のなか、其の幹部と目すべき者は比較的健康にして、今直ちに本島の独立、支那への復帰を企画するが如きものなしと雖も、現在の総督府政府に不満を抱き、之が根本的改革は本島人の自身の手に依ると、また間隔は更に遅れ必ずしも、少なくなとも植民地政治を望む者なる点に於いて一あり。誰に注意を要する点は彼等の多くが支那に対する観念を中心として動く、其の見解の異なるに従い、その思想及び運動の傾向を異にすることとなり…一つは支那に将来的に多大の望みを願し、支那は近く国際戦争ともに世界に飛揚し、必ず台湾を回復し得るものとの見解に立脚し、夫れは民族的特性を失はず、实力を養して往古待つべしと証なすなり。…之に対して他の一つは支那の将来に多大の期待を含まず、本島人独立の生存に重きを置き、令支那へ復帰するも今日以上の苦労に遇べき得る処なしと証なすなり。…然れども之等の者と雖も、支那の現状に失望せる結果の如き思想を抱くに至れるものにして、他日支那の隆盛を見ることとあれば、前者と同様の見解に復すべきこと想像に難かざる。」

このような、台湾知識人たちは、大陸中国の政治的統治下に復帰するか、独立の大陸中国とは別の国家を形成するか、植民地支配のなかで。特殊な地位を得てどまることはあるか、在住民族のように、前近代的な自らの生活空間の防衛意識など「抗日」態度が存在した。

以下、「抗日」の戦略構想における、「台湾」と「大陸中国」への志向態度を実際ににして、その諸形態と座標を検討する。2)

1) 「改良的懸想の形態」

台湾人が、合法的な政治組織を通じて、日本の植民地統治に対抗した最初は、日本人と平等の待遇を要求しようとした「台湾同化会」（1914年12月）の運動であった。この運動は、総督府の弾圧と在台湾の日本人の傷のもので「公害者スルモノ」とされ翌年2月に解散を命じられた。しかし、台湾各地に散在する、政治に関心をもつ有志を集結させた。その後、1919年12月の東京の留学生により「台湾アラユイ族革新報告書」、文化向上図ルを目的とした「新民会」が発足した。この「新民会」の結成に始まり、1921年10月に「台湾文化協会」が台北で発足した。台湾文化協会は「台湾文化ノ発達ヲ助長スル」3) を目的に掲げ、1000余名の会員を集めた。当時の状況は総督府が政治経済を許さなかったため、「文化の発達」を標榜しているが、東京の「新民会」などと連携して、台湾で文化活動を展開する一方、台湾住民の民族的な自覚の喚起に努めた。4)

この時期の最も重要な活動は、1921年から1934年まで林献堂らの指導の下で15回の連名請願を日本政府に起こした台湾議会設置請願運動である5)。運動の目標を台湾の自治の獲得に定めながらも、自治運動が殊に進むとすれば日本政府、総督府の同化政策（内地延長主義）との衝突を招くと判断し、完全な自治を要求する主張を退けた。そして、自力的に台湾総督の立法権、財産
このような運動のスタイルは、運動の中心的指導者である林献堂が、日本統治下の台湾人の苦境を救う方策を清朝維新運動の中心人物である梁啓超と会談した時、植民地下における苦境を訴えたことから起因する。梁は「これから30年間のうちに中国を、貴者を救援する能力を絶対にもとめた。もっとも良いのは、アイランド人のイギリスに対する抵抗をなうべきで、初めアイランド人が暴動を起こすと、小は警察でいて、大は軍隊でいて、結果は圧迫され尽した。後にいたって計を返し、イギリスの朝野と結び、次次圧力を破ることが出来、ついて参政権を獲得しイギリス人と対等に観る舞うことができるようになった。…貴者も何故にそれにならなかったか』と嘆き、林献堂の思想行動とに大きな影響を与え、日本統治に対する政治運動が緩衝的路線をとることに決定したと言われる。

張正昌が林献堂の行動を、「…台湾人の目の前の惨状を打破、台湾人の苦痛を軽減することであって、その最終目標が日本離脱、中国復帰かないに急いで標準しようとしたことである」と述べているように、そのモチーフは、潜在的な抗日意識をもつながら自動拡大という手法—妥協—で、政治的解決の実現を目指した行動であり新鮮な、穏健的さらには、近代的かつ合法的な運動であった。これが「改良」と呼称される所以であり、広大意味での「抗日運動」であると。

2) 「一体的懸権の形態」

将来、大陸と台湾との「一体化」を、すなわち一元的モーフを以て実現する考えられる抗日運動は、ほとんど中国大陸に渡った台湾知識人によって組織され、その主要な活動も大陸において行われた。かれらは、「祖国」中国の将来に期待を託し、日本人のコントロール下にあっては力を振るうことのできない台湾より大陸において祖国中国の革命と建設に力を尽くし、強大な祖国の力により台湾の解放をはかろうとする立場であった。以下が主要な活動である。

・中台同盟会（1926年3月、上海・南京）
・中台志盟会（1926年3月、上海・南京）

・台同会（1927年3月、広東）
広東の中山大学などを留学していた張潔、張月清らによって結成されたもので、日本帝国主義打倒、下関条約の取消、台湾の祖国への回収などを主張。蒋介石の反共クーデター後、27年6月、国民党当局により左傾団体と認定され、メンバーは四散。メンバーの一部は台湾共産党に参加した。

・台湾共産党（1932年～1934年、広東・福建省）
1932年～1934年頃、広東省や福建省で反日運動していた客系台湾人を中心とした団体である。その運動の目的は、「民族自主の精神に根ざし日本の臺灣統治を打倒し、臺灣漢民族の手により臺灣を独立し臺灣国民権を建設する」こととし、その手段として、広東を本拠地に設営し、宣伝、煽動により党員を獲得し、台湾島内民衆を吸収し、中国国民党の援助の下に暴力革命を実行とした。しかし、その活動は、その分子が台湾に上陸して抗日救国同盟に対するどうを配布するに至った。

これらの団体は、中国国民党あるいは中国共産党がこれらの諸活動に対して積極的に協力もしくは援助を与えているという確証は少ない。このことの主たる原因は、当時の国民党、および共産党が、植民地台湾についての明確な見解をもっていなかったこと、さらに当時の中国が内戦と帝国主義諸势力との対決の前に、「統一された中国」についての明確なビジョンを持つ持っていなかったことにあったと言ってよいであろう。

3) 「独立的懸権の形態」

抗日運動の最左翼ともいうべき「台灣共産党」は、植民地解放、世界革命をめざすコミンテルンの指導と援助のもとに20年代半ばに上海のフランス租界で結成された。台湾が日本の植民地であったため、台湾共産党は組織上、コミンテルンの一支部たる日本共産党の「台湾民族支部」となり、その指揮と命令下におかれていた。結党にさいしては、林木順、謝雪紅などが参加し、ほかに中国共産党代表として彭荣、朝鮮人共産主義者代表として
日本統治下台湾の「植民地化」心理——その意識構造と行動論理——（田村修彦）

呂運亨らが列席した。

ここで留意したいのは、台湾共産党の「政治テーゼ」である。そこには台湾における革命の展望として「台湾の無産階級を基礎に民主主義革命を通じて総督制政権を打倒し、台湾民族の独立、台湾共和国の建設を達成する」という台湾での「階級的関係」、「進歩的資産階級」として「彼等は尚は民族的圧迫を受けており、現在尚は革命的傾向を持って居るのである。但しその革命的行動は極めて制限的なものである。」としながら、台湾知識人を中心に入れられてきた台湾議会設置請願運動については直接的な評価を下していない。

このように台湾革命の性格は「日本帝国内共産・台湾の中国復帰の民族革命」ではなく、「日本帝国内共産・台湾革命の民族革命」と規定されたことである。このこととは、植民地解放の戦略が、中国革命の一部あるいは日本革命の一部としてではなく、「台湾革命」として構想された。そこには将来、中国革命が流れているような大陸と台湾との一体的、一体的、一体的形態の認識を示していないことの責任がある。

その活動は、本部を台湾におき、東京には特別支部を、上海には製作部を置いて、現地の台湾人団体との緊密な関係をはかるが、やがて中国共産党の指令をうけるようになった。台湾共産党はいわば占領方針の指令を受ける存在であった。しかし、その活動は中国や日本ともとより台湾においても地下活動の域を出ておらず、1931年6月に台湾共産党員が一斉に逮捕され結党から三年半で塚消した。

4)「土着的懸念の形態」

台湾における住民少数民族は、それぞれ閉鎖的な部族単位にかかれて原始的な生活を営み、その外部に対する恐怖心と敵対心とは、合せて部族外のものに対する鋭敏な攻撃的傾向を帯びていた。清朝統治以来、山地住民を「外와野営」とし、その居住地域に限って「蕃地」と称し、一般人の造立を厳禁しており、日本の植民地統治においても、対策は異なるが、「蕃地」に台湾総督府指定スル特別行政区ニシテ警察官ラテテ比ノ行政ヲ管セリメンツタル地域ニシテ普通行政区トノ交通ヲ禁止シテソし、清朝と同様な居住地域を一般人から隔離し、異なる施政ヲ設けていた。

しかし、一般台湾人の武力による抵抗運動が収束、さらに日露戦争を経て国体が落ちつく1906年まで、日本当局は山地住民に対し「単権権我戦ニニ依ル計」をとったが、第五次総督佐久間馬太は、「蕃地の稲穂」をその統治の一方法とした。同年5月から1915年までの間、山地人の反乱を力に注いで、その施策を「理薬事業」といった。それは、この期間に計18回にわたって、平野と農民とを派遣して山地住民を鎮圧または陥落を延べた。それは山地住民にたいする包囲網を各地につくって、これを山岳地域に押しこんで、さらに包囲網を縮小して投降をもとにして廃棄の作戦である。陥落時には陥落を配置する方から、鉄条網をはりめぐらして徹底的に廃棄した。

「理薬事業」の完了によって山地まで植民地権力が浸透するにいたり、日本の台湾統治は軌道に乗りつつあった。

しかし、蕃地にある露社で1930年（昭和5年）10月27日に突如として蕃社事件と称された大規模な山地住民（タイ族）3000人の抗日蜂起が、発生した。当日は露社公学校連合運動会の日で、日本人と漢族系台湾人の父兄や子女が集まっていた。開会にさがって国旗の掲揚をはめに、武装した200人の地元住民が会場に突入し、日本人のほとんど全員を殺傷した後に警察駐在所、役所、官庁をあつめて襲撃。三日間の占領の後、武器弾薬を奪い取り、山間部に退避した。この襲撃で日本人132名が殺害され、215名が負傷、さらに和服を着ていた台湾人2名も、日本人と間違えられて殺された。この事件は日本人のみを襲い漢族系台湾人には手を出していないところに特徵がある。

その後、800余の軍隊と、武装警察隊と漢族系台湾人丁団（青年団と称し、合わせて2700余者が派遣され、掃討が開始された。

掃討は10余日にあたり、これを「第二次蕃社事件」という。

蕃社事件の原因として、蜂起の中心人物であったアウヘッハ、ビホウシの証言によると、総督府による土地の収奪、強制労働、官憲の傲慢な態度などに対する怒りが爆発したもので、生活空間への介入によるプリミティブな土着的拒否として認識できる。

注
1) 前掲「台湾社会運動史」（台大出版会）第二編築台府警察沿革ニ及ぼす重要事象中本）1939年、318頁。
2) 若林正文「台湾抗日サヨナラズの問題の問題相図」（同『海基－台湾政治への視点』）研文出版、1986年、所収）110-131頁参照。
3) 前掲「日本統治下の台湾」との抵抗と弾圧」182-189頁参照。
4) 当時の台湾文化協会には三つの流れがあった。一つは、林献堂、蔡培民の啓蒙運動を中心に、従来の啓蒙団体として。
の文化協会の活動を維持しようとするもの。二つに
は、寄話水を代表とする孫文主義者もとづく中国国
民党政権温軟政策を基盤となしながら民族自決を目指
すもの。三つは、温満麗と王敏ケら自由主義思想を
基盤に温軟政策に無産階級の解放を目指すもの
であった（前掲原光氏『日本統治下の台湾民衆と台
湾共産党』14号、台湾史学会研究、1997年、所収）98−119頁。

また、文化協会の具体的な活動は、政治的活動は
禁止されていたために、その実際の活動は、新聞読
まれの設立、各種講義会の開催、巡回演講会などの文
化啓蒙運動を展開、迷信の打破、人権の尊重、衛
生の重要性、民族の自負を誇り、植民地民衆の無力
感を振ふられた（前掲『黄昇聴における待機の意
味』）64頁。

そして、その社会的影響は、以下のような台湾総
督府警務局の側面を考察する。「文化協会の創
立、台湾議会設置講演運動を開始するや、台湾民
衆に呼応するの等の運動は、再び彼等の追求民族
意識を覚醒し、革命に対する抱負をふやし、民心の
向を一変せしあるを」（前掲『台湾社会運動史
（台湾総督府警察沿革誌第二編首段以降の治安状況
中巻）』）168−169頁。

5) 台湾議会設置講演運動については、前掲『台湾議会
設置講演運動』3−28頁。若林正文『大正デモクラ
シーと台湾議会設置請願活動—日本植民地主義の政
治と台湾抗日運動—』（同『台湾抗日運動史研究』
研究出版、1984年、所収）19−163頁。周婉窈『日
時代の臺灣議會設置講演運動』自立報系出版
部、民國78年をみよ。

6) 歴史的に植民地での被支配民族の政治参加には、F
ラスとクレジョヴァとの関係での、日本総督府への
植民地議員参加の形式（参政権）。植民地政治の下
に植民地議員をおく形（自治）の2形態がある。
日本の植民地下にあった朝鮮では、1920年代参政
権の要求、さらには、朝鮮議会の設置運動があった
が、独立運動の強化発展につながって拒否され
た。

7) 前掲『日本統治下の台湾—その抵抗と圧弾』176
頁。

8) 張正昌『林獻堂与台湾民族運動』（台中、著者発行,
台灣史研究叢書之、民國70年）253−254頁。

9) 台湾の民族運動が改良主義、自治運動の範囲を超
えなかったのは、台湾の地主層がかかり広場に存
在し、これらの地主層が植民地的台湾農業の発展か
ら高度な作料を通じて一定の分け前をあずかり、
これらが中間層として存在し、朝鮮にみられるよう
な運動展開はとらえなかった（アジア経済研究所編
『日本における発展途上国研究』1969年）62−63

10) このような諸団体の構成員の活動の動機を理解する
にあたり、以下のような認識が考えられる。「台湾
から日本に留学し、日本と台湾を往来しているあ

11) 前掲『台灣抗日ナラシズムの問題状況再考』113−
116頁。川村昌郎『中国における台湾人組織—
その現在の意義について』（石川信雄教授選択記
念論文集『現代中国と世界—その政治的展開』昭
和57年、慶応通信、所収）555−584頁参照。

また、ここに掲げた諸団体以外にも、1920年代か
ら1930年代に大陆中国において以下の団体が存在
した。「台湾志社」、「平社」、「新台湾安社」、「門台
湾志社」、「上海台湾青年会」、「台湾自治同盟」，
」「旅団台湾同盟会」、「上海台湾学生連合会」、「台灣中
国同志会」、「中国台湾学生連合会」、「広東台湾学
生連合会」、「台灣民衆同盟会」、「台灣獨立
運動連盟」、「台灣民主党」などの諸団体が成立し
ていたと伝わられている（前掲『中國における台灣人
組織—その現在の意義について』）582頁。

12) 張新明『在慶応運動の発展史略』（台中、中央
書局、1974年）22頁。

13) 前掲『台湾社会運動史（台湾総督府警察沿革誌第
二編首段以降の治安状況中巻）』1939年、945頁。

14) この時期の中国共産党、中国国民党の台湾に対する
認識は、以下のように整理できる。中国共産党：
1921年7月の建団から1943年11月の中共政治局
会議においていたまでアジアの被圧迫民族である台湾民族
の対日本帝国主義の独立を支持する。中国共産党統治
下の政治的・社会的・文化的な台湾人国内の少数民
族として待遇する（Akio Moriyama,Ythe Issue of For-
mosan the Chinese Communist Party, Social Science
Research Institute, I. C. V., Tokyo, 1974。および、Frank
S. Hsiao and Lawrence R. Sulli-van, The Chinese Com-
munist Party and Status of Taiwan, Pacific Affairs, Fall,
1979。前掲『中國における台灣人組織—その現在的
意義について』559−560頁参照）。したことがとる、
台湾を中国的回復すべき領土の中に含めること
を公言にしたにもかかわらず（前掲『中國の
民衆と権力』論文会誌、1973年、152−155頁参照）。
また、1936年、毛沢東がエドガー・スノーに『すべ
てのわが国が客逃の国土を取り戻すことが目の前
では、すなわち満洲国をとりもどすならばうという
わけではない。けれども私たちは中国の以前の植民地で
あった台湾を取り戻す訳ではありません。けれども
私たちが中国の領土の独立を再確立した場合、
もし朝鮮人が日本帝国主義の領分であるかったと
目むならば、私達は彼等の独立戦争に熱烈なる援助
を与えるでしょう。台湾についても同様です』（E.
Snow, Red Star over China, 邦訳『中国の赤い星』76

---168---
日本統治下台湾の「植民地化」心理——その意識構造と行動倫理——（田村雄彦）

頁）と述べたが、実際には、内陸部においての国民
党軍との戦争の対決に直面した
中国共産党にとって、台湾問題についての具体的な
政治課題とはなりえず、またその余裕もなかった
（若林正文「台湾革命」とコミンテルン」（田村
1985年）。

ビホワリツ（高水清）加藤実編訳「霧社・筏の狂
い咲—霧社事件生き残り証言—」教文館、1988年。

IV. おわりに

本稿は以上のように、1910年代後半からの国際的デモ
クラシーの風潮や、台湾社会での各種の基礎的社会建設
（インフラストラクチャー）が台湾全域を一体化し、
「台湾大」の社会統合がもたらされた結果における台湾
住民の心理的意識形態を「直接的暴力意識」、「自己分裂
意識」、「孤立意識」として捉えた。

さらに、実際に確認したように、武装的抗日運動が失
敗した後の1920年代から観察できる抗日運動は、この
ような多元元における「植民地化」心理により志向され
た行動様式であった。そこで、植民地支配のなかで特
殊な地位を得てとどまるか（「改良的意識形態」）、
植民地台湾における歴史的状況の特殊性から「大陸中
国」の政権下に帰属するか（「一体化的意識形態」）、独
立の大陸中国とは別の国家を形成するか（「独立的意識
形態」）、あるいは、山地に住む先住の少数民族のように
、単なる自己の生活空間を防衛するための前近代的な
行動様式（「土着的意識形態」）などが存在したよう
に、その抗日態度の軌跡は極めて複雑であった。

同じく、日本の植民地であった朝鮮、一民族——一国
家が单一的支配を受け、その抗日運動が、抗日運動→
日本帝国主義支配の打倒—朝鮮の独立へとストレー
トに直結したのに対し、中国大陸から分断・隔離にお
いて支配された台湾での抗日運動がそのような植民地民
族運動と共通する発展パターンを持ちつつも、大きな違い
があった。換言すれば、台湾での抗日運動が日本支配
に対する政治的挑戦としてダイナミックな成長として帰
結しなかったとも言える。このことは、いままで、そ
れぞれの抗日運動者が共通して生まれ押していたイメー
ジ——「祖国」＝中国大陆——が、その「辺境」の地域とし
てのイメージ——「孤立意識」——として、潜在的な共通な
心性として存在していたとの無関係なものではない。

1945年5-17日、台湾が日本の支配から解放され中
華民国の一省となり、台湾住民は受動にかかった中華民国の
軍政人員を大歓迎した。台湾知識人の一人である林茂生
は、興奮した表情で息子に「血に私たちが自分たちの主
人となる時代がやってきたのだ」と語り、講演では「台
湾を新生させ、教育、文化、農業、工業を発展させ、
すべての人が自由と平等を享受できるようにしなくては

—169—
ならない」と民衆に語りかけていたと言う2)。
しかし、国民党政府は台湾人の政治参加を阻もうとし
た。林茂生は、「戦争が終わって以来、台湾は完全に孤立
無援の状況にある。私たちは満洲や怒りを訴えるところ
はない」と語ったように、いわば「台湾人に生まれた悲
哀」を訴えた。このような意識は、台湾が日本支配から
解放されても、台湾住民の共通な心性である「孤立意
識」が克服されるどころか、ますます大陸中国との心理
的距離が拡大された、と言える3)。
1) 小林文男「日本統治下台湾におけるナショナルな思
考(1)―「中国改造論争」の意味と周辺―」(アジア
経済研究所「アジア経済」1970年、9月、所収)41
頁。
2) 林宗義『私の父親林茂生』胡慧玲『島嶼愛恋』(台北・
玉山出版社、1995年)8頁。
3) 同上17頁。
4) この言葉は、李登輝総統と作家司馬遼太郎との対話
で李登輝前総統が、「過去、台湾人として生まれ
た、台湾のために何もできなかった」として「台湾人
に生まれた悲哀」という言葉を使った（司馬遼太郎
『台湾紀行』朝日文芸文庫、1997年、朝日新聞社、
378-379頁)。かかる文脈は過去、台湾がオランダ、
スペイン、清、日本などの統治者の交替が台湾住
民の意志と無関係にわたったときの状況が、「台湾人
」としての悲哀の核的成分であったが、林の心情に
もその共通性の一端が見出せよう。
5) 1947年の228事件は、台湾住民の大陸中国との心
理的距離の拡大を決定的なものにした。